

西田哲学会会報

第七号

題字 上田閑照

発行・西田哲学会事務局

〒九二九-1126

石川県かほく市内日角一番地

石川県西田幾多郎記念哲学館内

電話(〇七六)二八三六六〇〇

会長就任挨拶

大橋 良介

会長選挙に際しては、交替の必要を強く主張したのですが、再任されてしまいました。とうとうに任に堪えないことを恐れませんが、それゆえにまた、会員の皆様のご支援・ご指導をお願ひする次第です。前期に就任した際の感想は、いまま基本的に変わっていないので、部分的に反復となることを恐れず、ご挨拶を述べたいと思います。

西田哲学会は他の学会にくらべて、ふたつの顕著な特徴を有しています。ひとつは「A会員」の存在です。これは、西田哲学に接する人たちの範囲が、アカデミズム世界を越えて広がっていることを、物語っています。ふたつめの特徴は、「国外」の会員が多いことです。これは、年次大会での「外国語セッション」の定着として、結実してきました。上記いずれの特徴も、西田哲学そのものの特徴に起因すると思えます。すなわちひとつは、難解ではあっても人生を

考える者の心に直接に響くものを持つていること、そしてふたつには、どこまでも哲学という地盤に立ちながら、しかも西洋哲学と類型を異にした独創性と現代性を持つことです。

「B会員」と「C会員」の多くは、他の学会の会員を兼ねていられると思えます。そしてアカデミックな関心を主軸のひとつにしていられると思えます。西田哲学は哲学である限りは、学問的研究にもとづく思索を、われわれに要請します。この点で、過去三年間の『年報』に寄せられた多くの力作、新鮮なアプローチ等は、よろこばしい実績でした。

会を運営する側として、発展が順調となるように工夫を重ねていく責務がありますが、その点で、過去三年間に幹事および編集委員の方々には、実に誠実かつクリエイティブな運営をしていただきました。

というわけで、ABCそれぞれの会員と、幹事および編集委

西田哲学会 第七回年次大会報告

員の活動により、会は順調に発展してきました。喜びを分かち合いたいと思います。次の三年間もこの発展がつづくよう、細心の注意を払っていきたく思います。心願を込めて、会員の間にも、会員のどなたからもアドバイスを受け付けたく存じます。ご遠慮なく事務局宛に、メールやファックスやハガキ等でご教示ください。

西田哲学会第七回年次大会が、平成二十一年七月二十五日(土)、二十六日(日)の両日、京都大学において開催された。

二十五日の午前中には、恒例の一般向けの講演会である『善の研究』勉強会」と、昨年からの開催が始まった外国語セッションが開かれた。外国語セッションでは、ブレット・デービス氏(ロヨラ大学)の司会のもと、レオナルディ・アンドレア氏(京都外国語大学)が西田哲学の「空間」概念に関する発表を

行い、イーエン・メギール氏(新潟大学)が西田の「無」と竜樹の「空」に関する発表を行った。使用言語は英語であったが、フロアからも活発な質問が出るなど、非常に盛況であった。

午後の部においては、京都大学教授の藤田正勝氏の「西田・田辺哲学とシェリング」と、日本大学教授の小坂田継氏の「私と汝——人格的世界」という二つの講演が行われた。藤田氏の講演は、日本におけるシェリング受容史から始めながら、シェリングの哲学を軸に西田幾多郎と田辺元の論争を見ていくものであった。小坂氏の講演は、西田のテキストを丁寧に追いつながり、私と汝という問題を中心に、後期西田哲学の論理が完成していく姿を追い、その意義を明らかにするものであった。シェリングという外の視点から西田と田辺の論争を浮き彫りにする藤田氏と、西田のテキストに内在的な視点から人格的世界の意義を明らかにした小坂氏による両講演は、図らずも内と外の対照的な視点を通して立体的



講演「西田・田辺哲学とシェリング」藤田正勝

な西田哲学像を結ぶ結果になったのではないだろうか。

二十六日の午前の部では、満原健氏(京都大学)「西田・西谷における「論理」、轟孝夫氏(防衛大学校)「歴史哲学的思惟の陥穽」、小田桐拓志氏(スタインフォード大学)「映画の知覚の論理と外部性」の三つの研究発表が行われた。満原氏は、論理を重要な問題とした西田と、論理に否定的であった西谷との差異を、理事無碍法界や事々無碍法界という概念を中心に浮かび上がらせようとした。轟氏の発表は、西田の弟子達の「近代の超克論」を、スキャンダラスに扱うのではなく、近代批判の哲学として捉え直そうとするものであった。小田桐氏は、西田の「叡智的世界」における叡智的自己を、ベルクソンの映画の知覚やエイゼンシュタインのモ



講演「私と汝一人格の世界」小坂国継

ンタージュ理論を援用しながら、可謬的で偶然的な迷える自己として特徴付けようとした。午後の部では、外国語セッションの司会もされたブレット・デー

シンポジウム報告

今大会のシンポジウムは、「国家と歴史」のテーマで行われた。今回このテーマが設定されたのは、理事会のメンバーによれば、最近の西田研究においては、とりわけ「国家」や「歴史」に関するものが多く発表されている現状を踏まえ、ぜひ西田哲学学会の年次大会でも議論の場を設けてみたいとの意向による。

まず植村和秀氏(京都産業大学)が、政治学および思想史の立場から、「国家と歴史の側から、西田幾多郎を問い直す」とのタイトルで提題報告を行った。植村氏は、「世界新秩序の原理」の執筆を通

ビス氏によって、アメリカにおける日本哲学の研究状況についての海外報告がなされた。

続いて「国家と歴史」をテーマにしたシンポジウムが、植村和秀氏(京都産業大学)、板橋勇仁氏(立正大学)、田中久文(日本女子大学)の三氏を提題者として、嘉指信雄氏(神戸大学)の司会によって開かれ、活発な討議が行われた。

二日間にわたって熱のこもった議論が繰り広げられた。遠方よりお越し下さった大会参加者の皆様に感謝するとともに、裏方として大会を支えて下さった京都大学の皆様にも感謝したい。(文責・白井雅人)

じての、西田による当時の政治情勢に対する個人的な働きかけの試みは、「巨大官僚機構」や「二十世紀型国家」の無理解に基づくものであり、元来、無効なものではないかと指摘した上で、しかしながら、政治の使命を「人間の形成・創造」に見ていた西田の思想は、現代の政治の在り方に対する「根本的な異議申し立て」の視座を提示しうる可能性を示唆した。

次に、板橋勇仁氏(立正大学)が、「歴史的世界の個性的な自己創造と国家―西田哲学の観点から」のタイトルのもとに提題報告をした。板橋氏は、「国家理由の問題」(『哲学論文集第四』所収)や「日



シンポジウム「国家と歴史」

本文化の問題」(『第四論文集補遺』)などの論考に基づきつつ、歴史の現実の世界の構造から、国家の实在原理と意義を明らかにしようとした西田にとって、世界とは、「生命が環境を変ずると共に、環境が生命を変ずる」という仕方で自らを形成していくが、国家とは、そうした歴史的世界が「自己の内」に自己を形成する自己実現の焦点」に他ならず、「きわめてパラドシカルな共同体」として捉えられていたと論じた。

最後に、「西田の国家論の特質とその問題点」のタイトルのもとに提題報告を行った田中久文氏(日本女子大学)は、西田にとって「国家」とは、「歴史的種」としての「民族」を基盤とするが、「民族」が「国家」となるためには、「個人性、世界性、超越性という三つの契機が顕在化し、「民族」が「理性」的となり、「道徳」的となる必要がある」と見なしていたと指摘した。さらに田中氏は、西田のこうした国家観が、当時の閉塞した政治的状況

に対して一定の批判的意義をもったことは認めつつも、こうした「道徳性」に国家の使命をみる国家観は、「現実の「国家」が孕まざるをえない非合理性や独善性、さらには「根源悪」(田辺元)の問題を蔽ってしまうことにならないか」との疑問を提示した。さらに、氏は、西田の国家・歴史観と、和辻哲郎や高山岩男など他の京都学派の哲学者の国家・歴史観との関係及び差異についても論じた。

休憩時間中に集められた質問は多岐にわたったが、大きく分けると、三つの提題報告の内容に直接関わるもの、現代における「国家と歴史」の在り方に関わるものの二つに分かれた。「国家と歴史」というテーマは、西田および京都学派の哲学者たちの、時代との関わり方が様々な意味で問われるテーマだけに、質疑応答は、とても熱のこもったものとなった。

太平洋戦争という極めて困難な状況下で行われた思索・行動に対して後世が批判を向けることへの可否、時代的制約などを考慮しつつも学問的な分析や批判を遂行することの必要性、「世界史の立場」の今日的意義とその内在的問題、たとえば、ハイデガーの思想との

比較において際立ってくる「科学・技術」の位置付けをめぐる問題、社会の「多元性」を重視する見方と「国家」論との関連、国家の存在理由(正当性)および「国家の理念」と「現実の国家の在り方」との乖離をどう捉えるか、さらには、主に歴史哲学の立場から「国家と歴史」について考えた西田幾多郎と、より具体的な時代情勢との関わりの中で論を展開した高山岩男や高坂正顕などとの違いなどについて、大変活発な、時に激しい意見のやりとりが行われた。

グローバル化時代を迎え、「国家」をめぐる状況は、色々な意味で大きく変容しつつある――個々の国家の枠組みを大きく越える多国籍企業・国際金融資本・国際NGOなどの活動、温暖化・貧困などの地球規模の問題の深刻化など。しかし、改めて「東アジア共同体」構想が語られるようになった現在、西田および京都学派が哲学的にも政治的にも深くコミットした「国家と歴史」をテーマとした今回のシンポジウムは、日本と世界が現在直面する具体的な問題状況を考えるにあたり、多くの貴重な糧と示唆を与えてくれるものであった。(文責 嘉指信雄)

海外報告

アメリカにおける日本哲学の研究状況について

ブレット・デービス

こんにちは。ただ今ご紹介いただきましたブレット・デービス(Bret Davis)です。アメリカおよび英語圏における、西田哲学をはじめとする日本哲学の研究状況について、さしあたり自分の

経験をもとお話しさせていただきたいと思えます。私はもともとアメリカのヴァンダービルト大学(Vanderbilt University)大学院で西洋哲学を研究し、ハイデッガーについての博士論文を執筆しました。その研究途中とその後日本に十二年ほど滞在し、京都大学で日本哲学を勉強いたしました。五年前にアメリカに帰国し、現在ボルチモア市にあるロヨラ大学(Loyola University Maryland)という私立のイエズス会の大学の哲学科で教えています。ロヨラ大学の哲学科には、西洋哲学史と近代・現代ヨーロッパ哲学(いわゆる大陸哲学)のさまざまな分野を専門とする十二人の教授がいます。アメリカの大学で分析哲学の専門家がいないことは珍しいのですが、大抵のイエズス会の大学は西洋哲学史とヨーロッパ哲学を特に重視しています。いずれにしても、アメリカのほとんどの大学と同様、ロヨラ大学においても、従来西洋哲学のみを取り扱っていましたが、しかし近年、ロヨラ大学のように、アメリカの多くの大学は東洋哲学をはじめ、ラテンアメリカ哲学やアフリカ哲学に及ぶ、いわゆる「非西洋哲学」(non-Western philosophy)の専門家も雇うようになってきました。この傾向の原因として、アメリカの大学で頻りに唱えられている「多様性」(diversity)といった理念がまずあげられます。

この「多様性」という言葉は、最近、アメリカの大学において一

つの標語となっており、その意味合いには、人種・民族・性差別を根絶しようとする運動、そして、大学のカリキュラムが従来のように、西洋の伝統(殊にいわゆる「死んでいる白人の男たち」dead white males)による著作に制限されるのではなく、他の伝統や民族の著作をも包括するものであるとする運動が含まれています。もちろん東洋思想は過去にも勉強・研究されてきましたが、それが東洋学(Asian Studies)や比較文学(Comparative Literature)あるいは宗教学(Religious Studies)としてのみではなく、哲学科において、哲学として取り扱われるのは、わりと最近のことです。いうまでもなく、この傾向は、アメリカでの西田哲学をはじめとする日本哲学の勉強・研究にとっては大変良い機会となっています。

以前のアメリカの大学では、西田や他の京都学派の哲学者は、宗教学科では大乗仏教思想の近代代表者として見なされ、東洋学科では日本文化の代表者(あるいは主張者)として見なされ、そして歴史学科や思想史学科では日本の国家主義に関連する思想家として見なされることが多かったのです。たしかに、京都学派の宗教思想と政治思想についての著しい研究が、これまで英語圏においておおく公表されています。幾つかの例として、宗教思想に関しては、タイテツ・ウンノ氏が編集した *The Religious Philosophy of Nishitani Keiji*⁽⁵⁾、およびタイ

テツ・ウンノ氏とジェームズ・ハイジック氏が共編集した *The Religious Philosophy of Tanabe Hajime*⁽⁶⁾、また政治思想に関しては、ジェームズ・ハイジック氏とジョン・マラルド氏が共編集した *Rude Awakening: Zen, the Kyoto School, and the Question of Nationalism*⁽⁷⁾、およびクリストファー・ゴトウ・ジョーンズ氏が編集した *Re-politicizing the Kyoto School as Philosophy*⁽⁸⁾ をあげることができま

以上研究成果が示すように、宗教思想や政治思想、あるいは思想史の観点から京都学派に接近することは有意義なことでありま

す。なかでも、京都学派が「宗教」と「哲学」との関係を根本的に問い直しながら、宗教の意義を追求し続けたことは特に注目すべき点であると思えます。しかしながら、西田と京都学派の自己理解と彼らの主な学問的な意図、つまり、彼らのもとより「哲学者」であった



海外報告 プレット・デービス

というのを忘れてはいけないとも思います。彼らの画期的な成果は、西洋と東洋の両伝統を踏まえながら日本の豊かな、しかも極めて非西洋的な文化・言葉をもって「哲学」を新たにした、ということにあるのです。

主に大乗仏教から発する宗教思想は、たしかに京都学派の哲学の中心にあり、また、その太平洋戦争時の政治思想は、たしかに歴史的状况を配慮しながらも批判的に考察すべきものであります。しかし、彼らはその自己理解において、もとより哲学者であるので、哲学者として扱われるべきではないかと思えます。というのも、レヴィナスやデリダはユダヤ教の、リクルックやチャールズ・テーラーはカトリックの影響を受けているにもかかわらず、彼らはまず哲学者として見なされています。また、プラトンやフィヒテ、ハイデッガーなどは、論争を起こすような政治思想をもっていましたが、彼らはそもそも哲学者として見なされるべきであり、また、実際そうされています。そして、京都学派の思想にはたしかに東洋的・日本的な特質があるのですが、すべての西洋哲学者たちにも文化的・言語的な特質はあり、いずれの場合にせよ、もしその特殊性がいわば「終点」ではなく「原点」あるいは「出発点」となっているのであれば、それは哲学の妨げではなく、その必須条件なのではないかと思

います。西田と他の偉大な日本哲学者たちは、日本の文化や言葉が

もつ特殊な地平(限られた視野)の限界のみでなく、その哲学的な可能性を自覚し実現しようとしたのです。西洋の哲学者たちも、その日本哲学の方法と内容から学ぶことが大いにあります。

学際的交流はたしかに重要であり、また哲学は決して哲学科においてのみなされているのではないのですが、アメリカの大学において京都学派の思想が、東洋学科や宗教学科のみでなく、哲学科において、哲学者によって、取り扱われる時期が今ようやくやって来ていると思えます。残念ながらアメリカでは、日本哲学を大学院のレベルで研究することができるところは未だに極めて少ないのですが、最近いくつかの注目すべき書籍がでてきており、また近いうちにも発行される予定です。二〇〇五年までに発行された京都学派についての英語書籍は、私が構成させていただき、インターネット上でみられる *Stanford Encyclopedia of Philosophy* の「Kyoto School」事項の文献目録を参照していただければと思

います。ここでは二〇〇五年以降、あるいはこれから発行される幾つかのもののみをお伝えしておきたいと思えます。まずは二〇〇五年に、研究者たちのあいだで以前からコピーし、回されていた一九七〇年代に執筆されたロバート・ワーゴ氏の博士論文が *The Logic of Nothingness: A Study of Nishida Kitaro*⁽⁹⁾ として出版されました。また *Philosophers of Nothingness*

An Essay on the Kyoto School⁽²⁾の著者である南山宗教文化研究所のジェームズ・ハイジック氏は、現在五冊に及ぶ *Frontiers of Japanese Philosophy* と「こうしり」を監修されています。またハイジック氏は、トーマス・カスリス氏とジョン・マラルド氏とともに、英語圏におけるこれからの日本哲学研究のための新たな基盤となるテキスト *Sourcebook for Japanese Philosophy*⁽³⁾ を準備されています。これから来年中に発行されるものとしては、ロバート・ウイルキンソン氏の *Nishida and Western Philosophy*⁽⁴⁾ およびブライアン・シュレーダー氏、ジェイソン・ワース氏と私が編集した *Japanese and Continental Philosophy: Conversations with the Kyoto School*⁽⁵⁾ があります。これらの新しい文献が、英語圏において哲学に携わっているより多くの学者と学生に、西田哲学と他の日本哲学に取り組むように促すものであれば幸いと思えます。

日本哲学、特に京都学派について研究するために日本に滞在しようと計画していましたが、その時、京都大学にさえ日本哲学講座が存在しない、ということにたいして(さらに、未だに西洋哲学が通常「純哲」と呼ばれているということを知って)たいへん驚きました。来日し、大谷大学で研究している時、京都大学で新しく「日本哲学史研究室」が設立されたと聞き、その後、その後期博士課程に入れていただき、藤田正勝先生のもとで大変豊かな研究生活を過ごさせていただきました。すばらしい先生方、学生たちと知り合うことができ、近代日本哲学に自分なりに親しめることができたと思います。

さには、さらにもう一つの大きな理由があげられます。それは、近代日本哲学の起源は極めて多元的である、ということにあります。西洋哲学専攻の学生は、古代ギリシア以降の西洋哲学史、およびそれとユダヤ・キリスト教の思想史との交流を学ぶ必要があり、一方、前近代の日本思想専攻の学生は、日本土着の思想と共に仏教思想と中国思想も学ぶ必要があります。しかし、近代日本哲学専攻の学生は、その背景として、以上のすべてを学ばなければなりません。西洋の諸伝統と東洋の諸伝統の両方を深く勉強したうえで、はじめて西田たちの出発点に立っているのです。日本哲学の専門家たちももちろんそれを把握し、研究されています。

学が、過去の反響や他国の反映に終わらず、生きた伝統として発展し続けてゆくためには、西田哲学や他の日本哲学を研究する学生と学者たちは、西田たちのテキストを分析し解釈するのみでなく、敢えて東洋と西洋の諸伝統を踏まえ、西田たちが求めたものを求める必要があります。もちろんその必要性に応じられている日本哲学者たちもいらっしやいます。特にこの西田哲学会の創設と進展を拝見しますと、日本哲学の現在における充実ぶりが分かり、その輝かしい未来像も浮かんできます。
 註
 (1) Taitetsu Uno (ed.), *The Religious Philosophy of Nishitani Keiji* (Berkeley: Asian Humanities Press, 1989).
 (2) Taitetsu Uno and James W. Heisig (eds.), *The Religious Philosophy of Tanabe Hajime* (Berkeley: Asian Humanities Press, 1990).
 (3) James W. Heisig and John C. Maraldo (eds.), *Rude Awakenings: Zen, the Kyoto School, and the Question of Nationalism* (Honolulu: University of Hawaii Press, 1994).
 (4) Christopher Goto-Jones (ed.), *Re-politicising the Kyoto School as Philosophy* (London: Routledge, 2008).
 (5) Bret W. Davis, "Provocative Ambivalences in Japanese Philosophy of Religion: With a Focus on Nishida and Zen," in James W. Heisig (ed.), *Japanese Philosophy Abroad* (Nagoya:

Nanzan Institute for Religion and Culture, 2004), pp. 246-274. ブレット・デービス「日本の宗教哲学における刺激的な両義性——西田と禅を中心に」J・W・ハイジック編『日本哲学の国際性——海外における受容と展望』二〇〇六年三月、世界思想社、二九五—三二九頁、また Bret W. Davis, "Rethinking Reason, Faith, and Practice: On the Buddhist Background of the Kyoto School," 二〇〇六年三月、『宗教哲学研究』二二二号、北樹出版、一一—二二頁を参照。
 (6) Robert J. J. Wargo, *The Logic of Nothingness: A Study of Nishida Kitarō* (Honolulu: University of Hawaii Press, 2005).
 (7) James W. Heisig, *Philosophers of Nothingness: An Essay on the Kyoto School* (Honolulu: University of Hawaii Press, 2001).
 (8) 湯浅 浩二『西田幾多郎の宗教哲学』上巻、東京、早稲田大学出版部、二〇〇九年、二二—二四頁。
 (9) James W. Heisig, Thomas P. Kasulis and John C. Maraldo (eds.), *Sourcebook for Japanese Philosophy* (Honolulu: Hawaii University Press, forthcoming).
 (10) Robert Wilkinson, *Nishida and Western Philosophy* (Hants, UK: Ashgate, 2009).
 (11) Bret W. Davis, Brian Schroeder, and Jason Wirth (eds.), *Japanese and Continental Philosophy: Conversations with the Kyoto School* (Bloomington: Indiana University Press, forthcoming).

エッセイ

ポシヨ カン パツ

平澤郁夫

千人余の義務教育の教職員で組織する長野県の上伊那教育会は、

主要な事業として毎年、西田哲学を読み合わせており、六十一回を数えた。本年のテキストは、「左右田博士に答う」であった。教育の根本を耕し、教師として深く生きたいと願う若い教師たちの運営で、六月から四回の読み合わせ会を持ち、秋富克哉先生のご懇切な解説に助けられ、哲学に照らして児童生徒理解や教師のあり方等の具体を深めた。また、夏期講習会と称して夏休みの二日間を、読み合わせのまとめと、一般の聴講者も加えた講演会とに当てている。秋富先生のご講演は、私たちにも切実な課題である「科学技術時代における人間の課題―脳死・臓器移植の問題に寄せて―」であった。

本年の夏期講習会の閉講式で、私は芭蕉の「古池や蛙飛びこむ水の音」の句について、概ね次のような話をした。蛙が発した水音は、常人が聞き逃してしまいうような微かな音「ポシヨ」であったろうが、芭蕉の真に直接なる心には、直観として響いた。全体的具体であり直覚的自覚でもある。その響きは、おのずから意志的・判断的自覚と直結して働き、ポシヨの正体を問い続けさせた。古池は、木立や澄んだ空気等の広がりに包まれ、太古からの悠久の時を刻ん

で、そこにある。その時空がつくり出した古池の静けさは、芭蕉の澄んだ心耳と照らし合い、判断的自覚はその状況を思惟をして突き詰めさせ、ポシヨをポシヨたらしめて十七文字に結晶させたと思われる。

西田は、直覚の具体として、美術家や宗教家の直観をあげている。その例を、今、芸術家芭蕉の句で見た。直観は「判断も加わらない前、色を見音を聞く刹那の真に経験そのままの状態」「真に具体的なもの自覚的であり真の無の場所に於てある」という。では、宗教家の直観について、正法眼蔵第二十五「溪声山色」の、道元が

西田哲学と関わる

研究会等のお知らせ

新・西田哲学研究会（於京都）のご案内

故・西谷啓治先生の指導のもとで四十年ちかく続いた西田哲学研究会が、西田の最後の論文「場所的論理と宗教的世界観」の読了をもって、終了しました。新たに「西田哲学研究会」が始まりましたが、当面の連絡先は左記です。

連絡先・大橋良介 (madago@peach.plala.or.jp)

案内は、基本的にメールでなされますので、参加希望者はこのアドレスへご連絡ください。

大悟の因縁について語っていると、ここで見てみたい。「：棄磔撃竹響、於時忽然大悟、乃有頌、云一撃」三所知、：」の撃竹響「カン」は、香嚴智閑禪師の意識を真の無の場所にした。また、「：桃華のさかりなるをみて、忽然として悟道す。偈をつくり大偽に呈する：」の「みて」の刹那、雲志勤禪師の鏡に満開の桃華が「パツ」と映り、悟を開く直観となったのだと思う。本来、大悟者は「処処無蹤跡」で、悟りの蹤跡を残さないという。両者が師大瀉に呈した頌・偈は、真に直接なる反省意識が、その境地について語らせたものと考える。

西田哲学研究会（於東京）のご案内

隔月一回、読書会を開催いたします。原則として第三週目の土曜日の午後三時から六時までですが、都合で日程が変更になることがありますので、関心のある方は左記の事務局までご連絡ください。次回の開催日時、開催場所、テキストをお知らせいたします。また、当研究会では毎年、研究会誌「場所」を発行しています。

東京都杉並区荻窪四―二五―一 一―七〇―一

西田哲学研究会事務局 nshidaphi@mx9.ttcn.ne.jp

寸心読書会（於石川）のご案内 一九四七年から続いている、一

般の人を対象とした読書会です。現在は、西田幾多郎（寸心）の弟子・三木清の『人生論ノート』を毎回一章ずつ読んでいます。

日時 毎月第二土曜日午後二時より午後四時まで

場所 石川県西田幾多郎記念哲学館 4F 研修室

講師 田邊正彰氏（金沢学院大学教授）

参加費 一回二〇〇円（飲物代）

理事選挙結果と新役員体制

第三期（〇九〜一一年度）理事選挙結果

郵送にて六月三十日（火）締切で行われた「〇九〜一一年度理事選挙」につき、西田哲学会事務局

である石川県西田幾多郎記念哲学館において七月三日（金）午後四時より開票と集計作業を行った結果、届いた投票用紙（十名を記載可能）が五八枚、有効投票は五七〇票となり、次の二十名が当選となりました。（五十音順・敬称省略）

秋富克哉、安藤忠雄（辞退）、浅見洋、板橋勇仁、上田閑照、大熊玄、大橋良介、岡田勝明、氣多雅子、小坂国継、竹村牧男、田中裕、田中久文、野家啓一、藤田正勝、松丸壽雄、水野友晴、美濃部仁、森哲郎、米山優

（文責・大熊玄）

第三期（〇九〜一一年度）役員体制

右の理事選挙結果を受け、七月

二十六日の理事会にて次の役員が決定されました。（五十音順・敬称省略）

嘱託理事（国内）…ジェイムズ・ハイジック、小林信之

嘱託理事（国外）…ジャサント・トランブレ、ロルフ・エルバー

フェルト、林永強

編集委員…浅見洋（委員長）、板橋勇仁、森哲郎

監事…井上克人、酒井潔

幹事…秋富克哉、板橋勇仁、大熊玄、小林信之、白井雅人、杉本耕一、水野友晴、美濃部仁、米山優

（文責・大熊玄）

理事会報告

理事会（旧理事による）

西田哲学会第七回年次大会の開催に合わせて、七月二十五日（土）の昼間休憩時間、京都大学文学部第二講義室で理事会が開催された。出席理事は十三名、委任状二通、さらに幹事二名の参加があった。議題・報告事項は以下の通りである。

一、第八回年次大会について

「七月第四土曜日とその翌日の日曜日」という日程原則、および「京都・東京・かほく市の持ち回り」という会場原則によって、平成二十二年七月二十四日（土）・二十五日（日）、東京で開催という

ことが、詳細は秋の理事会で検討すること併せて確認された。

ただし、この日程は流動的とせざるを得ない意見が提出され、正式決定は十一月の理事会を待ってな

されることとなった(以下、新理事会の項目を参照のこと)

二、理事選挙について

大熊理事より、理事選挙結果が報告され、併せて安藤忠雄氏の辞退が報告された。これを受けて、大橋会長より、会にとって関係の深い安藤氏を特別会員に推す提案がなされた。あくまで会費を支払う意志をお持ちの氏に対し、審議の結果、今後は会費を払う特殊な特別会員になってもらうことに決定した。

三、編集委員会報告

岡田編集委員長より、年報が無事出版されたことの報告があった。さらに、年次大会における口頭発表の応募要領(三月末締め切り、八〇〇字程度の要旨と経歴・業績表)を会報に掲載する提案がなされ、確認された。また、年次大会の研究発表者の審査機関を明確にすることが提案され、実質は幹事会で協議するが、最終決定機関は編集委員会とすることが承認された。また、幹事会と編集委員会のスムーズな情報交換のため、若手幹事の一人が編集委員会に入ることが承認された。

四、事務局報告

大熊理事より、会計監査と予算について報告があり、いずれも承認された。

五、その他

海外会員の会費送金問題について継続審議とすることが確認された。

理事会(新理事による)

選挙で選出された新理事による理事会を大会終了後に行なうという

前回理事会における決定事項に従い、七月二十六日(日)、全体会プログラム終了後、京都大学文学部第二講義室で、新しい理事による理事会が開催された。出席理事は十三名、幹事二名の参加があった。議題・報告事項は以下の通りである。

一、新体制について
(一) 会長は「理事による互選」という規約の条項に従い、審議の後、理事による投票を行ない、最多得票を得た大橋理事が会長再任となった。
(二) 委嘱理事について、国内在住嘱託理事に、J. ハイジック氏、小林信之氏、また海外在住嘱託理事に、B. デービス氏(英語圏)、R. エルバーフェルト氏(独語圏)、J. トランブレー氏(仏語圏)、林永強氏(中国語圏)が推薦され、それぞれ依頼することが承認された。

(三) 編集委員会については、編集委員長に浅見理事、編集委員に森理事と板橋理事の就任が決定した。英語論文の査読について、査読者の人選を含めてデービス氏に相談することが、また英語・独語・仏語のサマリーのネイティブチェックを海外在住嘱託理事に依頼することが確認された。

(四) 監査として、理事選挙において得票数が多かった井上克人氏と酒井潔氏に依頼することが決定した。また、次回の役員改正の時は、監査も選挙することが確認された。

(五) 幹事会は、氣多理事を除く旧幹事をそのまま再任し、新たな若手幹事を随時探すが確認された。

二、秋の理事会について
十一月一日(日)に明治大学が立正大学のいづれかで行なうことが決定した。なお、両校はいずれも来年度の年次大会会場として有力な候補であるが、七月第四土曜日とその次の日曜日という年次大会の日程は、大学のテスト期間と重なるために会場の確保が困難であるとの意見が出た。結果、来年七月二十四・二十五日予定の次回大会の日程変更も改めて検討することとなり、恒久的な日程変更も視野に入れた検討を継続することが承認された。

三、その他
会費納入について、三年未納による除名会員は機械的に処理するのではなく、リストアップして案内を出すこと、また、理事や幹事の知り合いには連絡をして会費納入の依頼をすることが確認された。海外在住会員については、会費未納でも機械的に除名せず、払える時に払ってもらうように運営することが確認された。

(文責 秋富克哉)

「西田哲学研究基金」について

二〇〇八年度、第三回の西田哲学研究基金公募には三名の応募があり、厳正な審査の結果、三名全員を適格とし、それぞれ三十万円を交付しました。

張政遠氏(香港中文大学哲学系導師)、研究計画:「西田幾多郎の現象学的哲学」

香西克彦氏(学校法人京都建築学園 京都建築専門学校専任講師)、研究計画:「西田哲学と建築論—ポイエシスを巡って」

西塚俊太氏(東京大学大学院博士課程)、研究計画:「西田哲学における「歴史的社会的な世界」論の成立要件」

今年度も、引き続き交付基金を公募します。一件につき三十万円から五十万円、数件の採択を予定しています。下記の要領で応募下さい。審査結果は、『年報』で報告します。

- ① 提出書類
② 研究計画(八百字程度)
③ 提出先
〒六〇六一八五〇一 京都市左京区吉田本町、京都大学文学研究科、氣多雅子研究室
④ 締め切り
二〇一〇年四月三日(土) 必着
⑤ 備考
二年以内に、研究計画報告書を出していただくことになっていきます。報告形態は、刊行物のコピー、抜き刷り、あるいは四千字程度の

編集後記

前編集委員長の岡田勝明先生に代わって編集の責任を取ることになりました。大役ですが、編集委員の森哲郎、板橋勇仁両先生の協力を得て、何とか責任を全うしたいと思えます。会員各位のご協力なくしては順調な年報、会報の発行はできません。

報告文書とし、提出先は上記の氣多研究室とします。
西田哲学研究基金運営委員会
二〇〇九年度代表 秋富克哉

「西田哲学学会年報」掲載論文の公募について
『年報』巻末の応募要領にしたがってご投稿ください。たくさんのお応募をお待ちしております。なお次号第七号掲載分は二〇一〇年一月末をもって締め切りとさせていただきます。なお『年報』巻末の応募要領をご参照下さい。

「年次大会」における口頭発表の応募について
第八回年次大会(平成二十二年七月開催)の口頭発表者を公募します。応募者は三月末までに、八〇〇字程度の要旨と簡単な経歴・業績表を添えて事務局へお申し込み下さい。

これからも皆様の協力をお願いいたします。
今回はB・デービス先生の報告をはじめ、かなり盛り沢山の内容になりました。なおエッセーの原稿をいただいた平澤郁夫さんは長野県上伊那教育会の主催者のお一人です。
(編集委員長 浅見洋)